

登高記：文苑

著者	かずを
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 9
ページ	4 1 - 5 0
発行年	1901-12-24
URL	http://hdl.handle.net/2298/5256

下に係る辭となるべくは此等とは同源ならずむの延びたるものなり故にむのてにをはにこのと云ふことを云ふに同じ立すくをしきと云ふは立たんことをしきと云ふことなり。

此他助辭としてはずむなんてむてしにしめりかなかもすがねからゆ等論究すべき所も多くあれどもうは後の事として一先づ此れにて筆を擱くべし (完)

文苑

登高記

かずを

一 右大津みち、ひだり陣内道と、平假名で自然石に刻んである道しるべが、峠の上に立つてゐる。自分等はしばらく足をどめた

單調なる杉の並木と、坦々たる塵多き道に飽いた旅人は、必ず此處に杖を止めて、笈を流る、清水に渴いた咽を潤はし、過來し方をふりかへるであらう。

何といふ美しい眺めだらう。右も左も見上ぐる程の峯が聳れて、其間を白川が流れてゐる。秋の末であれば、水は瘦せて大半あらはになつてゐる河原の、磊々たる石の間を、淋しい音を立て、急いでゆく。常磐樹に交つてゐる櫟、樺、栗、銀杏などが黄、淡黄、紅、色こそ異なれ、何れも秋の心を見せて、倒に氷に映つてゐる。

眼を拭いて眺むれば、流れは毀れか、つた板橋や、土橋の下をくゞり、村を縫ひ、野を走り、うねりうねつて、末は遠く遠く見なくなつてゐる。その先には立田山、金峰山乃至は温泉嶽が、濃く淡く藍色に染まつて、碧空を限つてゐる。廣い平地の上には、こゝに一村、かしこに一村散らばつて、藁屋根、白壁、赤い鳥居、寺の御堂などが森越に見ゆる。畠に耕す村人は手にとるやうだ。水車の軋る音、牛の聲、たゞしは人々の興をやる野良唄が、混々合つて聞ゆる。それがあたりの静かな村――晩秋の暖かな午后の日影がさして居る村々から起るのであるから、誠に長閑に、面白く感ぜらるゝ。右手に美しい谷越に聳ゆる俵山と始終相並んで、自分等は櫛木の方へと道を辿つた。畠は傾斜になつてゐる山腹に、一段一段と層を造つてゐる。稻塚は蜜蜂の巢を据ゑたやうに、あち此方に散在して、雀はその周圍に噪ぎ合ふ。道は此の畠の間を通つてゐるのである。概して塵多いこの道を、白手拭を冠つた村乙女が、三四頭の牛馬を、一人で手綱もとらず、静かに驅つて行く。自分等と道を登りゆく程に、一步一步に偉大なる山麓に近づくを感じた。

二

立野といふ驛についた。馬車宿、荷物取扱所などが四五軒ある小村で、阿蘇一帯の高地と、肥後の平原と連絡する一の驛路である。朝わ夙より日の暮る、まで、自慢の咽に鄙歌唄つてゆく馬士の影は絶われない。日に幾度か吹き立つるがた馬車の喇叭は、この孤村を賑して居る。風車を華客に、小さな蹄鐵所もある。兎に角、村は小さくとも相應に活動してゐる。

こゝで道は右左に分れる。自分等は川に沿ふて右をとつた。白川の兩岸に峙つ山と山とは、愈相迫つて、こゝに自然は其柔かな手で、面白い谷をつくりよめた。

自分等の立つてゐる所は、山腹を切開いた道で、削りなした絶壁は、幾條となく一樣に六角柱をなしてゐる玄武岩よりなり、さながら木材を積重ねたやう。觸れなば落ちなんと思はる、程、恐しい、峻しい岩は、長く屏風のやうに連なつて、旅人を強迫してゐるのである。俯して見れば、數十丈の溪。物凄き程岩に碎けて、颯と雪を散らす白川の水は、激したかと思へば深碧の色にかへり、こゝに深淵をつくりては、彼方にゆるく流れ去る。幾千となき毛槍のやうな松柏科植物は闇い程乱立して、向うの山を見ぬまで蔽ひ、益々この谷を物凄くしてゐる。面白い景色！ 自分等は語り合ふを要しない。互に見合せた顔色は、明かにそれを示してゐるではないか。

この絶壁に沿ふて道を下り盡せば、谷はやゝ開いてくる。四五軒計の温泉宿が目につく。こゝが戸下温泉である。黒川と白川とは、こゝで落合つてゐるのである。

三

これより道は又斷崖を傳うて、登り阪になつてゐる。自分等は遠きを厭ふて近道によつた。温泉宿を抜けると直ぐ白川である。こゝでも水の音は凄まじい。此方より彼方の岸へ導くものは、岩より岩にかけ渡した狭い板橋——橋といはんよりも寧ろ平たな一枚板で、踏めばたをりて今にも落ちろうである。漸くのとて匍ふようにして渡れば、細い小徑は絶壁より木立の間に入つてゐる。

自分等は木立を出で、岩を攀ぢ川邊に下り、骨折つて流れを測つた。崖の下にたてられた朽木温泉場が目に入つた頃は、恐らく數町も歩いたであらう。

温泉事務所とかいふに宿りを求めて、やがて二階に導かれ、こゝに旅装を解いた。

室は流れに面してゐるので、障子を推せば——固より欄木は絶壁の下に、至て狭い谷にあるから、

文

身は壺中にある心地。眼界は限られて、眺めの廣さを望むとは出来ない——終日近づきつゝ遠ざかりつして沿ひ來つた白川は、淙々と岩に激し岩を動かして、樓前を流れ去るのである。

川上に方つて、激しい水聲が聞えるので、驚いてふり向けば、見よ！ 數丈の絶壁よりは、譬へば白布を曝したやうな瀧が懸る。今消ゆか、つてゐる殘照は、前山の頂をそれてそを淡紅に染めてゐる。水烟の美しさは何ともいへない。

欄干に凭れて眺めてゐるうちに、夕日は沒した。夜の色はこの閑靜な朽木の谷を罩め、わが衣を渡る風氣の、ろゝろ寒きを覺れた。

四

圓かな月は昇つた。光と影どが入り乱れる。

闇に包まれた朽木の谷も、今は生き／＼となつてきた。雲一片もなく、月光で青白く見ゆる大空は、谷間を越えてかゝつてゐる。速かな運動をして、絶えず落ちては流れ、流れては落つる瀑布は、縦に燃ゆるが如く輝いてゐる。瀑より落ちた水は、岩を衝いては月光を碎き、彼方に走り去る。宿の二階より眺めた瀑を前にして、廣い乾いた川床の上に、今自分は佇んでゐる。

風はろよとも起らない。林はざわめかず。ただもう太古のやうなこの朽木の谷に、夜の寂寞を破つて滔々と落下するは、鮎返りの瀧。

女神が白妙の衣を脱いで吊したごとく、絶壁にかゝるこの瀧の、颯と飛沫を散らせば、霧みたやうな水蒸氣は兩方に分れて、瀧壺の面を立迷ひ、遂には消えてしまふ。

月下に繰返さるゝこの瀧の、落下するさまを見てゐるうちに、自分は恍惚となつてしまつた。

胸は靜かに呼吸するに、思は心の底に湧く。
親しい人の顔、なつかしい人の姿、生きてゐる人も、亡くなつた人も、自分の心にありありと見
る。わが生涯はわが前に展かれる。永く忘れてゐた事どもが思ひ出される。過去の追懷、未來の幻
影、自分は宛然自分を離れてそれを見るやうだ。

心の作用は烈しくなつて、小鳥の狂ふやふ。空想は空想を生じて果しもない。

あたりのものは一として、そをかき乱すものはないのである。月の光も、流るゝ水も、はた滔々た
る瀧の響も――。

五

朝日は阿蘇の外輪山の一角よりさし昇り、谷には水蒸氣がたちそめた。さなくとも薄き旅衣に、一
しほ透るやうに覺ゆる朝寒。

自分等は美しき朽木の谷を後にして、阿蘇登山の途に上つたのである。凋落しうめた樹々の色、深
碧なる空、輝きわたる日の光、これを眺めると人の心は躍り立つてくる。

傾斜甚しい峰を越して、朽木の里が見えなくなつた時、自分等は廣い枯野に立つてゐた。秋の氣が
満ち満ちてゐる穩かな朝の空を穿いて、所謂、阿蘇の五岳を形造つてゐる山々が、行手に聳ゐる。
自分等の周圍は一面の草。風が吹かないから、動揺ゆよもなければ、物の音も聞けない。たゞ、草より
草にかけ渡した、長い蜘蛛の絲が、黄はんだ高い莖の上にキラめくばかり。

この廣野を辿つて行くうちに、空には何處となく隱翳を生じて來た。と見る間に二三滴の雨が、ハ
ラ／＼と頬を打つ。サア、雨だ。自分等は立止まつた。

外輪山の飲けたる所——俵山と二重嶺との間より、今迄見て居た熊本のあたりが、かき消す如く消えて了つて、雨か、一面に地平線に沿ふて白く走る。

弱けれども太陽は矢張輝いてゐる。自分等は足をはやめて、野を過ぎり小さい村を後にし、爪先上の阪路にかゝつた。西の空は闇く、雨は今にも襲つて來さうである。

道の側の、俄かに闇をなつた雜木林越に、眞白い湯氣が盛んに渦卷きのぼるので、湯の谷はさ程遠からぬを知つた。で、ならば湯の谷までなりともと思つて、自分等は馳け出した。

雨は今熊本の平原を、相追ひ相ついで走り、俵山も二重嶺も瞬く間にかくし、さながら大波の寄するやうに、横に颯と開展して、廣野の上を狂ふて来る。

ソレ彼處に家がある。サア彼處にと、自分等は驀地に馳けつける。

自分等が湯の谷についた時、雨は屋根の上に盛んにたばしつた。

何といふ雨だ。

六

雨はやみさうにもない。おれに風さへ加はつて、寒さはましてくる。天も地も皆濛々たるうちに包まれて、日のある方のみが少し明るい。

これでは山に登る甲斐がない、一層引返さうと云ふ者もあつたが、折角此處まで來たものを、今更下山するのも残念だ。山上の壯觀は望まれますとも、せめては火口のはど、渦卷く霧の中に立つて、靜かに烟を吐く阿蘇の呼吸を見るのも面白いだらうと、自分等は雨宿りを立出た。

硫黄の氣が著しく立昇る湯の谷の地獄の傍から、道は段々と高まつて、自分等を頂の方へ導く。

雨の爲に滑らになつた野路を、幾度か迂りながら登つて行く。風につれてくる硫黄の氣は自分等を悩ます。

雨は次第に晴れた。けれども霧は散らない。右も左も深い谷と思はれる、馬の背を歩むやうな道を、たと前人の黒い姿をたよりに辿つてゆく。

見ゆるものは、道の兩側の、半身を没する程の、雨に濡れた枯草ばかり。

手の凍ゆる位寒くなる。自分等は道を急いだ。

見給へ。友の一人がかう云つた。皆振返つた。

何と美しい眺めではないか。風に吹かれて颯と破れた霧の斷間より、太陽は流れの如く其光を注いだ。すると麓の村がチラリとする。日影を浴びた家、森、畠、小川などが見ゆる。と思ふと霧は再び閉ぢ合ふ。

自分等は一齊に、悦びの聲を擧げた。高山であくては、とても遭遇しない。面白い眺めだ。幾度か繰返さる、この變化多い光景を、自分等はかへり見しつゝ、進む。

山腹に沿ふて歩く程に、遂に高い處に出た。道は此處に盡きないで段々と下に向ひ、末は霧に入つてゐる。

今、霧は散じて、日に照らされた自分等の影は地上にうつる。あたりが判然となる。

驚くではないか。處も處。かゝる山上にかゝる平地があらうと、誰が思はう。自分等の前には、茫々たる廣野が横たはつてゐる。千里が濱といふ。向うには。湧きたちかへる阿蘇の黒烟が、風に靡き風に靡き、大空を縦に横に、かき亂してゐる。あたりの景色を楽しむ爲に、自分等は憩つた。

天氣の定りなき、晴れたと思ふ間もなく、空は又曇り始めた。

俄に、左の山かげより野を横に騰走して來た霧は、右に聳ゆる山を掠めてやつて來た霧と、こゝ千里が濱の原頭で衝突し黒烟も、遠山も、廣野も、人も、我も、一切白濛々たる裡に隠してしまつた。自分等は再び、廣野を過ぎる茶褐色の道をさまよはねばならなかつた。友も我も無言でしどくしどく歩いて行く。

文

噴火口ある山の根に、阿蘇山上神社といふ社と、藁家一二軒ある所がある。

こゝに自分等が着いたのは、彼是十二時頃でもあつたらう。家に入つて晝飯をしたゝめ小一時間も休んだ。外の方では今吹き出したと思はれる風が、寒さうな音をたて、吹きすすんでゐるのに、かゝる荒野の賤が家に、爐を擁しつゝ、さし焚べる櫓に暖をとる愉快といつたらない。

七

家を出ると、雨霧は名残なう晴れて、白旗のやうな秋の雲は、穏やかな午后のみ空を行きかふ。自分等は社の側をすぎて登つた。

虚空に高波を打つたとも見ゆる、全面灰色の、黒烟なびく阿蘇の御山は直ぐ目の前に聳ゆる。

千古の火山灰が積つた上にもいや積つて、風に吹かれ、雪に埋められ、雨に洗はれて多様の變を呈してゐる山腹をたどり、風が烈しいので、三間に一ヶ所、五間に一ヶ所、積上げられたラバの陰に身を寄せながら駆けて行くと、高い處に出た。

此處には、渦巻く炎のうちに、抜き放てる焔の劍を握りしめ、大きな眼に九州の野を睥睨する不動尊が巖かにラバの塔の上に立たせ給ふ。

自分等は何時しか噴火口のはどりに立つてゐた。燃ゆる燃ゆる地下の爐より立昇る火氣が、其逃路をたゞ此一所に見出して衝き出つるでもないはふか。炎の風、炎の波は、今照り降す太陽から、濁れる影と慄へる光とで彩づけられて、音をも立てず直に天を衝いて上騰し、南へ、北へ、靡き棚引く。今此火山は誠に平和の象を示してゐる。けれども御山知ろし召す荒魂が、一度怒つたらどうだろう。召使ひたまふ五十猛神は、直に狂へる雲にのり、炎の風に鞭打ち、千山萬水見る影もなく、數萬の人類もここに絶滅してしまふであらふ。

自分は慄然として無言で佇んでゐた。

このたとへしもなき自然の壯觀に對して、何といつたらよからう。人はたゞ一口、感歎の言葉を放つて、自然に謝するより外はない。眞に此處に來た人でなくては火山の壯觀は感得するとは出來まい。筆も、口も、想像も、到底及ぶ所でないから。

この時、こゝで、自分が受けた印象は、心より消え去るとはあるまい。

自分等は火口のはどりより、今の不動尊のところに歸り、ラバの塔の陰から四方を見下した。

登る時に、霧に包まれて居た麓の方は、隈なく見渡される。外輪山から取りまかれた、直徑七里の舊噴火口の中に散在する野、丘、河、森、町や村や、さながら摸形の地圖を眺めるやう。

アレ内牧が、アレ宮地が、あの森の向うが阪梨村など、自分等は知つて居る村の名など、一々指示して楽しんだ。

あゝ、太古は一大坩堝の中に渾沌として熔け合ひ、炎が盛んに上騰して居たこの舊火口も、今は賑はしき一郡となり、交通開け、人はそれを知らざるやうに、塵多き往還を唄ひながら行き交ふ。

或はこの噴火口に生れ。一步も外へは出でずに、又もこの土にかへるものもあらう。自分は宇宙の變遷を、今更のやうに感じた。

八

時は自分等をながく山上に止めなかつた。

烟の見えなくなるまで、幾度かふり返りふり返り山を下つた。

下りであれば歩みも捗り、千里が濱、湯の谷もさ程の骨折りなくして通り過ぎ、かの朽木谷の上なる枯野に出で、暫く閑寂なる天地を領して歩いた。

日は俵山あなたに傾いて、見渡す限りの枯草を渡る風が、薄ら寒い。

見返れば阿蘇の五岳は、麓にかへる自分等を見送つてゐるやうである。

沈みゆく夕日の爲に、彼方の山は淡き火影に佇めるやう。此方の山はまだ赤い胸を自分等に向けてゐる。

日は没し、やがて紫色となり、灰色となり、遂に五岳は幽然としてくれてしまつた。

村の若者が口ずさむ、秋の夕の小唄を聴きながら、細徑を下り、櫛木についたのは、家々にははや灯かゝやき、夕飯の支度に忙はしい時であつた。

(終)

十一月廿三日の新嘗祭は、日曜と重あつてゐるさいふので、ふさ阿蘇登山を思ひ立ち、友人四名と行つた。その紀行がすなはちふれである。